

三才全傳南柯夢

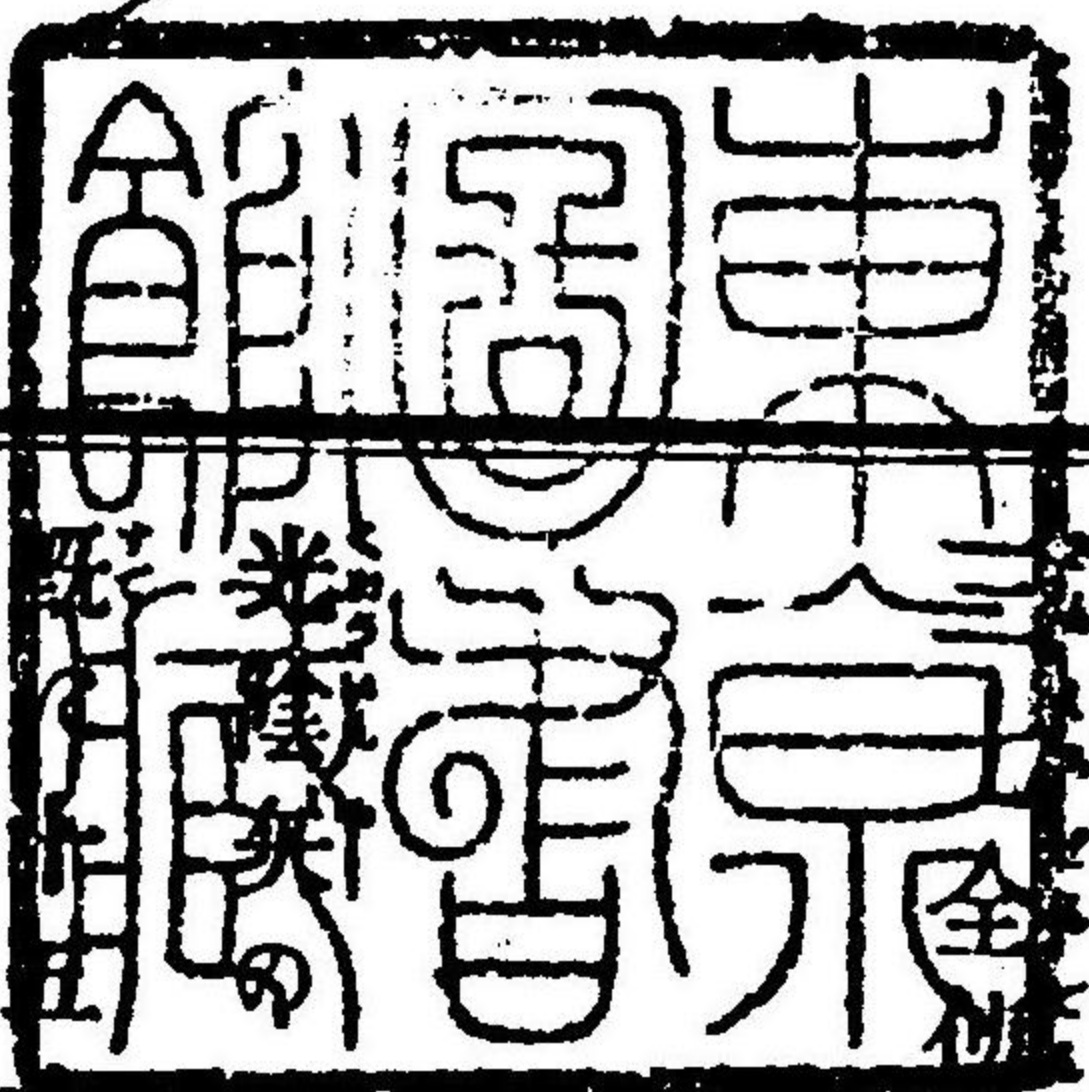
卷之三

特40

41

東 京 圖 書 館

七 冊	一 七 號	別 二 架	函	小 說 類	和 書 門
--------	-------------	-------------	---	-------------	-------------



南柯夢卷之三

東都 曲亭馬琴編次

臥房の胡越

とく。又梭のどく。秋去春來たつて。蟻松典膳が女兒園花の
 才にぞかれりける。父の典膳の豫より赤根半六が一子半
 七を。女婿にすべき準備あるをもて。主君續井順昭へ。とりく彼親
 子が事を吹擧し。ある日又まうすやう。半六五條の村主を承つてよ
 り多年露はかりも私なし。加之兒子半七ハ。文武の才藝人に超へた
 り。僕日來その擧動を見るよ。近習に召使れて。まかすべきもの歎。夫
 俊徳を明にして。能を擧。不能を矜給ふ。君のこゝろにあり。まかれ
 ども長流船横つて。渡すものなく。夜光も又燕石に劣りあん。賢を
 薦る。愚臣が微忠也。用ると用ひ給はさるとハ。尊慮にまかさるべ

うもや。と言語と竭して聞えあけしかば。順昭これと諾なひて。すな
 ち半六に五條の縣守を兼さし半七を召出して。嫡子吉稚丸の近
 習に召使れける。典膳鼠負の沙汰をもつて。彼親子を汲引すとい
 へども。半七が心さま。伶俐て。忠孝拔群なる事は違はだ。その爲体を
 見て。老臣もこれが爲に羞。主君もこれに對して。容を改ると多かり。
 さるによつて半七の。いく程もなく近臣の上にするて。職祿忽地
 父に超たり。續井の家隸多かる中。文武の道に心と委ね。忠信無二
 なるもの。厚倉二郎太夫友春と。赤根半七とのみ。たえて肩を比る
 人なし。まかるに半七の。今茲やうやく二十才なり。その年紀をもて
 論ぎるとき。厚倉にも勝れり。とて心あるもの。これを稱讚さるの
 なかりしとぞ。かくてその年の終。蟻松赤根の兩臣。その子の婚縁
 を。主君へ願ひ奉り。明春園花を嫁らして。秦晋の好を締んとて。假に

媒妁の男をこしらひ。送にその用意をなんいたしける。そのとき半
 六の。こが子とちかく招きていふやう。蟻松氏へこが親子への恩人
 なり。既にその蔭と蒙ると久し。倘彼人の吹擧によらざら。これも御
 身も。山兒にて朽果なん。それさへ忝なきに。此度最愛の女兒をもて。
 御身に妻せんと宣はする也。今日ハ殊さら。吉日なれば。双方の願
 書を上るにこそ。このよしを聞えおらせんとて呼びぬ。歡び給へか
 しといふ。半七聞て。さ。父の顔をうち瞻り。仰に。いへども。某む
 かし母の遺言によつて。おさんと婚縁を結びしかど。彼不幸にして
 猛獸に銜去らる。おかりといへども。今に活るや死せりやあらざ。万
 に一ツも彼女子。恙なくて世にあらば。母の遺言に悖るのみあらざ。
 彼に對して不義なり不信也。男子三十にして室ありといへば。妻を
 娶る事いまだ遅からき。よく思ひめぐらして後に回答し奉る

べきに社。といひも果さるゝ半六忽地氣色變てきたるが。また思ひかへしけん。呵くとうち笑ひ。御身がいふ所理あるに似たれど。その甚迂遠と。今に于て。おさんがこゝにあるをさしおきて。この婚縁と結び不義なり。いかにせん。彼荒熊にとられ。その屍を索得せといへども。元や八九年音耗なり。枯たる朶に花の開とも。それが存命て歸り来ん日。ありせもおほえぞ。ざるを假初の義理に羈がれ。一女子の爲に子孫の後榮をおもひさるゝ愚也。且上世に。人究て命長し。このゆゑに三十にして娶るとも運からず。降れる世に去からず。人生五十年。七十の稀也。元やくより子を生せされ。父母衰老して。その子と教るに心ゆかき。御身學問たれば。和漢の故實のありぬべし。まかれどもその杓子定規なり。こが子あしかれとて。かくいはんや。おさん憎しとてこの婚縁を結ばせんや。もづから思慮して

惑ひをとり給ひぞじいふに。半七のなは頭を低。袴の間に手をさし入れ。默然として居たりしが。且まていふやう。御慈のふかき事。こさまへてゆへと。信義の係るところ。いかにともすべなし。公事にあらぎして。權家に入る。士たるもの、恥なり。況て一の宿老の婿となりて。肩を聳さんは嗚呼がまし。人の貧富の天なり命也。よじや生涯薪を樵て世をたるとも。心清く。朱買臣にも羞べからず。死灰の人に愛せられん。愛られざるにまかど。銅臭を美て好を締。禍の端なり。まけて今まはし待せ給へといふを。半六聞もあへず。大に赤て聲とふり立。やとれ半七。汝賢たちて。まはく。こが旨に悖る。母の遺言のをも重じて。父を否し。さゝやかなる義理に羈れて。親に愛を失へとい。何の書に記してかある。これ一旦蟻松氏に約諾して。この婚縁と定ふる。今忽地にこれを破らば。彼人豈たゞに止んや。そ

れこそ大なる禍の端なれ。所詮彼人に憎れての。己が親子の活がたし。是非及べき。といきまきて。面色赧なり又蒼くなり。猛に刀を引提つゝ。外面へ走り出んとすると。半七忙しく臂を伸して。袴の裾を引とめて。おん憤の甚ときも。家の爲とお母すをあれ。あとう聞奉るに。わらき。三たび諫て聽され。號哭して従へといふ。本文あり。此うへの御意の隨にてありなん。固辭ひひじ。固辭ひひじとまうすにぞ。半六やうやく氣色と和け聞こきたら。仔細及べき。己が家の幸福これよます事なし。汝日來の伶俐に似ぞ。かばかりの事に思ひ惑ひし。年の弱き故にこそ。いよく婚姻整ひか。夫婦睦して。舅姑よ愛せられた。立身の階梯と踏な放ぞといふに。半七の長きて。仰うけ給ひりひひぬ。御心やすかるべしと應しか。父の大に歡で。やがてこの日願書ともつて。半七が婚縁の事と聞えあげし程に。その年

の終りに双方故なく主君の許を稟。婚姻ハ正月の中旬と定めて。まづ聘禮とせりかひしぬ。さるからに半六ハ。屋棟を葺更さし。塀を塗らし。席薦の面と新にさし。紙窓を貼かえなせするに。いと短き冬の日を。心いそしく喜しけり。又蟻松が家ハ。園花が衣服調度の儲に黄金と費し。すべて美と盡させといふと。是彼冬も果て。わら玉の年のそじめになりしけれ。典膳夫婦ハ。わが子の爲に黄道吉日を卜て。既に婚姻の日もなりぬ。園花ハ。大轡に駕らんとするとき。敷浪の女兒にいふやう。婦ハ三界の家なり。百年の苦も又樂も。みな他人にまかす身かれ。只柔順にして。妬なきを。恒のこころとせよとの。物の本見ても。あし給ひつらん。されば幼きときハ。父母に従ひ。成長てハ。夫に従ひ。老てハ。子に従ふなる。この三従ハ。いふもさら也。五ツの障もわりといへ。ひじりの女兒と愛やかせし。



情を合く
花
半七
奇眉

南無阿彌陀佛

東京和泉出版

親の權威を笠に被て。夫に倦れ給ふまよ。一トたび夫の家を出てハ
 覆木盆にかへりがたし。他と心と懐て。誠を竭して齊眉たまへ。やよ
 やよと教諭せば。園花ハまへへ應てさていふやう。稚きより汝が
 夫ぞと聞えまらし給ひしが。ふりわき髪も肩過て。かくまいり齊眉
 ものを。なでう等閑し侍るべき。よじや身の愚なるより味もいとも
 生きて彼處を出んじハ。思ひ侍らまといふに。敷浪ハさもこそ。どう
 ち點頭つゝ目送りけり。かくて園花五條し起き。婚姻障るまもなく
 整ひつ。洞房花燭の景迹ハ。くたくしこよ。こゝにハ省きていハ。是
 園花ハ稚きより見もし見られんして。生をうつさしより。この人
 ならでハ。どころに香し娘夫なるに。年組ハ二八の春にして。容止
 いと艶妖に。心さまいと恰剛かりき。又半七八今茲廿一才しして。顔
 色の端麗なる事ハ。梨花の雪をも欺くべく。文武に宏才なる事ハ。竹

林の群も入るべし。往古より佳人ハ才子に因がたし。駿馬ハ伯樂
 に遇がたし。かゝる夫婦ハ。實に天縁なめりて。或ハ羨み或ハ妬し
 と思ふものも多かり。赤根が家にハ。歸寧身入の吉席に日數經て。夫
 婦ますく睦しく見えしかハ。典膳も敷浪も。よき婿と擇得たりと
 て歡おそ限りなく。敷浪ハとりく五條へゆくを。身のたのしみと
 いたしける。世の中の親をうろなへてかくこそあらめ。おかるハ半
 七ハ。父の命に悖がたくて。此度婚姻ハなしたれど。おさんが生死を
 聞定まら。縦夥の年ハ經るとも。他と女子ハ志を移さじ。と思ひて
 し事なれハ。園花を娶りても。たえて一夕もひとつに睡らま。されハ
 じて又強面氣色ハ見せまして。豊ハ殊さらに他事なく相語ハ。坐す
 るときハ席と隔てき。食するときハ折布とならべ。いと睦しく見ゆ
 るほどに。半六ハこの形勢におちるて。潜に歡び。わが子おじめの言

語への似せ。園花と掘みかたらふ事。かくのとくなれば。わが家の幸福このうへあらむとて。いよ、蟻松に倭媚。わが子の新婦を管待すこと。只賓客のとくせり。されば園花が兄曾太郎も。をりく、奈良より来たつて。半七と交参。とますく、厚かりしかば。藩中の諸士。赤根親子を侮るものなく。却阿諛らふにぞ。半七のいと心うき事に思ひける。さる程に園花の。こゝろに足らざる所あれば。靴を隔て癖きと搔くがどく。又啞子の苦と舐るがどく。思ひ迫れといひも。あらさき。夜、いたづら。山雞の尾上の月と在明て。對なき枕を恨つ。春もや。暮ゆきて。四月にもなりけり。このころ。日の長き限なれば。ある日敷浪の。奴婢を將て歩より五條に到つ。赤根が家に音なへするに。半六の奈良へ出仕して。半七の園花とともよ。小座敷に居るよしを。焚婢がまうせしかば。敷浪の。從者を出居のかたに待し。案内も

させせ只ひとり。半開はなちたる亮隔を。二隔ばかり越てゆくに。女兒も増もこれを。をえらで。半七の紙窓の下に。物の本と閱して。見かへりもせせ。園花のその母じり。侍りて。何やらんもの。いひだけなれば。このき夫婦のさし對ひ居るを。うち驚さん。心つきなき所爲也。と思ひて立も入らき。おほ亮隔の蔭に立在て。扇を半押ひらき。脚のあたりをうちあふぎ。をりく。彼處を關窺たり。園花の半七に。ものいふよすが。やあかりけん。たて。出す茶の茶杓にも。水漏らすまじと思へども。心おかる。夫に對ひ。世の人。物に参り。遊山をて日をくらす頃なるに。物の本の見給へ。御身の爲にあしかりな。ん。さらへがおさなき手まへ。かれと。これきこしめされきや。少しの心えるけくも。なり給へ。めといひかけて。と出す茶碗を。半七は。やをら手に裏て。喫をへり。けふの終日の休暇なれば。心ゆりせられて。

不圖見かゝりたる草紙の捨がたくて。日の闌るをあらざりし。これ
よりの御身こそ。うち守り居て。倦も給ひけぬ。と回答するに。園花
のなほいらんとこして。いひも出さ。膝のわたりに手習ふて。すまつき
ながらまた去らぬ。閨の留奇南の移香を。とめて得しさのこが袖へ。
報らむ顔を押あて。芽出し楓のえづかひしさを。やうやくに思ひ
堪。何事の御こゝろに。稱ぬとも得とまへぬ。身の愚さに人とうら
むか。とおはさんのかほ鈍ましけれど。こが身こゝに参りて春も過。
えや百日になり侍れど。真の情を見せ給はせ。さりして。又一トす
ぢに強顔も聞え給はで。活と殺しみえ給ふ。馬打るゝより苦しく
侍り。夫婦の縁し。出雲にて。神の結ばせ給ふとぞ。心がらにてあふ
まなる。筑摩の鐶のかきく。結ばも果ぬ縁し。ありとも。吉備の
中山なか。く。に。わぢ瀧の海の瀬ならで。浮たる戀のいさあらせ。真

女兩夫。見えせど。稚きよりいひ論され。又稚きより親と親とが。こ
ころに許せし。婿夫とハ。人さへありてはべるなる。心つきなき事わ
らハ。打も懲しも給ハ。かくまを物ハ思ひ侍らじ。推辭がたくて
娶給へど。珠てなむむるます花の葉。に道とが。トとて。出てゆけが
しの人のめのみ。愛々しけに見せたまふ歎。妬しと思へど。恨みこぶ。よ
そがもひとり泣はかり。目睡もせぬ枕に。涙のかゝらぬ夜間もな
し。思ひ不そりて。化野の露と消ぬとも。一言の怨み。いひじとたし
なみても。女子て。ろの澄はかよも。深き歎きのやるかたなさを。憐
とハ見給はせや。心つよし。とはかりよ。一聲よ。と泣沈めハ。半七間
て歎息し。縁故を聞えねハ。恨と給ふも理なり。これ婚姻のその夜よ
り。枕席と共よせざるハ。御身いとむしと思ハ也。さらく。忌嫌ふ
にわらき。その事とくよもあらせまほしく思ひしかど。明白に告る

ときハ親の非を擧るに似たり。とせんかくせんと。躊躇て黙止たる
心苦しきハ御身より。この半七こそ勝るべけれ。今ハ匿に匿がたし。
思ふ程と聞ゆとも。かならせしも洩らし給ふな。抑これ稚きときハ。
結髪の子あり。母の末期に頼と夫の盃さへさし給ひにき。それよ
り先。こが父の悞れて。彼親を失はしぬ。このとき孤と養育て。成長
のち半七に娶し。身の罪を贖んと。誓ひ給ひし事もあり。はじめとい
へハ如此くとなり。終を語れば箇様くくと。その條の事ハすべて審
に説ららし。さていふやう。この故に。これ此度の婚縁と。ふたゝび三
たび推辭しかき。父ハ又。蟻松氏の庇に絆され。更に豫ての約束と違
じして通り給へハ。父の命にも叛がたく。又彼女子が恩義棄かたし。
件の女子ハ九才のとき。荒態ハ銜去られて。存亡定かならせとも。こ
こに至て年來の志を轉さんハ不義なり。所詮こゝろよく御身を娶

りて。父の心を安くし。夫婦の名のまにて。枕席をとんにせざハ。御身
かならせ父母に告て。奈良へ歸り給ふべし。一旦こが妻じなるとも。
なほ原の未通女なるときハ。御身に損なし。瑕なき珠に疵を著せ。か
へさんものと思ふをもて。さて強顔ハありけるなり。浮世の義理の
絆にハ。終に結びも更がたき。縁しと思ひ諦て。これから奈良へ歸り
てたべ。一十日こゝにあらせてハ。こが心又一十日安からせ。飽もあ
かれもせぬ人を。離別さするが信ぞかし。一生添ふと思ハるハ。人の
妻とのなり給ハト。誑られきと思はれんも。いと面なき所行なれど。
聞こき給ハハ。恨も散なん。聞こき給へといふ聲も。外ハ洩さト聞せ
じ。と近う寄ほと園花ハ。背向に退て輾轉縁故を去らし給ふに。いか
ぞかわらう聞侍らん。宣ふ事ハ毎事に。理ならぬよしもなし。こが身
ありてハ御こゝろの。安からぬと宣ハすれば。秋にもあハて憂き鹿の。

奈良へ歸らんと思へども。死せぬ夫の家を出じと。母にいひつる言の葉の露もまた乾ぬその間に。これから飽て歸りしと。いひれふものか。いひもせじ。これより先に結髪し。人の生死とあるまで。他と妻に娶るとも。ひとつ枕に睡らじと誓ひ給ひしその信を。半七が身に稟るなら。妾側室で果るとも。さぞ喜しく侍りなん。そうら山しと思ふ程。かき所なきこの身なり。情ぞかし。慈悲ぞかし。襦袢の裾。扇の外。せめて後方に夜をわかさし。人めばかりの妻と呼び。夫といひせて給へれかし。心ひけふより尼法師。そるべきものを梓弓。そるまで宿の案山子ぞと。襷と給ひね。といひかけて泣女兒より。泣じと袖を噛締る。亮隔越の敷浪が。苦しき義理と恩愛に。婿と女兒が誠心と。聞て忍ぶ。忍べれど。一聲洩らす咳に。げんひする人ありと見て。半七も園花も。猛に形と改れど。落る涙と泣顔と。紛らすまへえ

あかりけり。

華洛の僑居

浩處に。あるじ半六。奈良より退き來て。出居の方なる伊豫簾を掲。こは園花が母君。いつの程にか訪せ給ひし。半七のなごて。出も迎さるといふに。敷浪の氣色を見せじと。含笑て。いふ。こが身も只今まいりしか。婿も女兒も。いまたあらば。こらひが参る。常の事あり。うち捨おきて休足し給へといふ。是彼の聲を洩聞て。夫婦いそしく走り來つ。とりなく奥に誘引にぞ。みあもろとも一室に入りて。賓主の坐をこから。寒暖を述。安否を問ひ。焚婢茶をもて來て敷浪にすゝめ。又主に進らせたり。そのとき半六は。こが子に對ひ。今日猛の仲事あり。汝をも召さるべけれど。頼のことなれば。おのれにいへ。と宣はせしをもて。走り歸りぬ。豫てまねるどく。郎君吉稚丸の。質弱多病にま

しますかれバ。ちや十八九歳まじなり給へとも。童わらわたちにておひする
 かるべし。ちかるに。近ちか會あ。癆ろう症しやうめきたる氣色きしきにて。且かつ暮くれ籠かごりがちに坐ま
 すあるよ。醫い療りやうもいまだ驗けんを見せぞ。よりて老らう臣しん談だん合ごう。かゝる煩わづらひ
 への繁はん花はなの地ちに出いし進まらせて。この隨まに物見遊山ぶつけんしやうざんとし進まらせ
 なバ。その功こう。鍼灸藥餌しんきうやくじに勝かるべし。と聞きえわけしかバ。大毀たいき謀ぼうなひ給
 ひて。さらバ潜ひそやかに浴よくへ上あせよとて。猛まうにその用意よういあり。ちかれと
 も從者じゆうしや夥おほ召めい俱ぐし給たまハ。人ひとにちらるゝ事こともやとて。これらをバいと
 察さつし。近ちか臣しん只ただ三人さんにんと定さだられ。その徒たに。今いま市いち全ぜん八はち郎らう。布ふ施せ蝶てつ九く郎らうと今
 一人ひとりの半はん七しち也や。老らうたるかたに。心こころをおかれんか。とて。物もの馴なたる壯さう俊しゆん
 のみを擇えられたれば。よろづにこゝるを用もちひ。守まも傳つたき奉たごれとの仲ななる
 ぞ。と聞きえちらすれば。半はん七しちハ頭かぶを低ひ。唯ただ々々として命いのちと稟りやう。半はん六りく又また敷し浪なみ
 に對たいて。聞きせ給たまふがとくなれば。ちやくとも半はん七しちハ。この秋あきの季きまで

の浴ゆにあるべし。姑ははさへなきとが家いへに。弱よわき女子むすめをひとりひとり在あせんハ
 いと心こころくるし。母はは御ごのこゝに來きませしこそ幸さいわいなれ。げふよりの園おの花はな
 を奈な良らへ伴ともひて。半はん七しちが歸かへるまで。預あづかりてたびてんやといふ。敷し浪なみハ
 今いまはのかに聞きたる事こともあれバ。この便べんなしと思おもへとも。女むすめ兒ごとこゝ
 へあらせて。いよゝ心こころもとあければ。すなはち應おこじていふや。宣のたま
 ふところ。さらハがおもふにおなじ。これとけふ將まさて歸かへらんハ。かほ
 早はやし。半はん七しちが鹿か島しま立たと目め送おくらして。奈な良らへ伴ともふべし。園おの花はな。さハ思おもひぬ
 か。といひかけて見みかへれば。女むすめ兒ごハとかうの應おこもせぞ。いよゝ懶なまき
 氣色きしきあり。かくて四五日よひのうち。吉きち稚ぢ華わ洛らくへ啓ひら行ゆ給たまへ。半はん七しちハ園おの花はな
 別わかれと告つ。父ちちと舅おやぢ姑ははの身みの暇ひまをまうじつ。同どう僚りやう布ふ施せ今いま市いち等らも。るじも
 に主しゆ君きみの轎こしに引ひそふて。若わか葉はかきこま立た出でたり。時ときハ四よ月げつの中なか旬じゆんに
 て。星ほしまげらある黎あ明めいに雲くも間まを過する杜つ鵬ぼう。歸かへるにちかじと鳴なとい

園花が身に思ひあつて。名残をしさと本意をさし。血を吐はかり歎きせり。さる程に數浪の縁由を典膳に告。女兒を奈良へ迎とりしが。いぬる日竊聞して。半七が義を守る縁故。夫婦が問答を審に去りて。驚き憂。一トたびその志の移らざるに感激し。又一トたびの半六がかゝる事をバふかく匿きて。年來さま／＼にいひこらへ。これが爲に。乙が女兒の一生を快りと思ふに。腹たゞしさいやませしが。威勢もて迫るとも。心ゆかぬものハ男女の中なるに。慰にいひいでて。女兒が久後。わしかりぬべきかとして。夫にも聞えおらせ。園花にも問で。おなじ歎きにふし柴の。ま／＼歎息をたりける。かゝりし程に園花の形なきしと。いへばえに。いのでぞいと。身と焦す。澤の螢もすがれゆ。六月のところより心持あしとして。打臥たり。さればとて終日臥すにもあらざ。父母のこれが爲に。藥何くれの

事。さま／＼心を竭せども。想より病わづらへ。醫師もせんすべなく。後にハ常の事となりて。一日へ起。一ト日ハ臥。頭のほそりも日にそひぬ。是のさておき半七の。郎君と守傳て。洛上り。洛東祇園の社頭なる。人の別業を購得て。こゝに僑居さし進らせ。續井家の郎君なる事。のこらなり。近臣の名さへ隠して。何某彼某と稱へしか。日來大和へ交加する商人すら。これをえるものなかりけり。かくて吉稚ハ三人の近臣を將て。下邸に轎を扛らし。割籠をもたし。洛中洛外の神社佛閣。名處古蹟を遊覽し。心はれやかな日をおくる程。病おこたり。果。心持清く。さくなりて。生平よりも健なり。又奈良より。日一日に飛脚到來して。起居を尋問す。そのたび。園花ハ病を推て。書翰かい寫め。菓子乾點やうのものを。半七ハ贈り。又數浪も。女兒が書翰。一巻そえて消息し。衣服何くれの事。參々にまうさ。と直こ

なたへ聞え來し給へ。洛の隣の國なれど。旅としなれば。自在あらさ
 る事おはかるべし。何頃か歸り給はん。女兒ハ日數のそ儂つゝ。そな
 たの空を瞻望くらし侍るなど。いと叮嚀にいせしかば。半七も西
 陣の織物。城殿の扇などを贈り遣して。これが報じす。是より先。厚倉
 二郎太夫。典膳が兒子。蟻松曾太郎と。互代。洛に上りて。吉稚の安
 否を問。又所用と承りて歸りしが。吉稚病愈ての後。よろづを半七
 にうち任して。詣來るも稀なるに。半七ハ七月の中旬。至りて。猛
 に寒熱し。假初に病臥たるが。遂に瘧疾となりて。日を経れども得起
 き。いく間もあらぬ。僑居に。主君のほとり近く病臥してあらんハ。畏
 しとおもひて。今市布施に相語ひ。吉稚に聞えわけて。別に五條わた
 りある。小家を借て。その身ハ一人の奴隷を俱し。其處に引移りて保
 養す。そのとき今市布施等。吉稚に密語まうすやう。半七が病煩ふよ

しを奈良へ告あらせなば。老臣等心もとなしとて。別人とて。彼に
 代するなるべし。その人もし君の御くゝろに稱ぬものどもにてあ
 らば。この風景を殺しめはんか。瘧病ハ。大かた三七日を限りに愈
 といへば。且くこの事と。奈良へあらせ給へども。某等二人かくてあ
 れば。何の障かひべき。と信だちてまうすにぞ。吉稚聞て。あかなりと
 し。終。その事を奈良へいせせ。半七にもこのよしと。うと得さ
 そるに。これも又。いく日もあらで愈べきに。告せして。父にも妻子に
 も。物を思ひせぬに。あかじとて。等閑に。まていひもやらせ。これを全
 八蝶九郎がさま。の計較して。主君に淫酒をすゝめたる。張本と
 なりにけり。そも彼今市全八郎。布施蝶九郎の兩人ハ。續井譜代の郎
 黨なれども。その心さま半七に。無下に劣りて。實に奈良坂の兒手
 柏ハ。憎べき佞人なり。彼等ハ。上に父母なく。下に妻子さへなく。只

言と巧よして君を欺き。飽まで媚て。傍鮮を思ふとあし。夫信言の美
 ならき。美言の信からせ。宜なり佞言の。甘く去て蜜のどし。吉稚丸か
 ほ年少軟弱の公子なれば。これを慮らせ。彼兩人を寵みて。二なきん
 のとせり。因て此度の從者よも擇み出し。却半七をいふせく思ふ氣
 色なるに。半七猛にわづらひて。五條の旅宿に退きしかば。全八蝶九
 郎ハその隙を得て。吉稚よ遊興をすゝめ。半ハおのれらが身の樂に
 いたし。剩このころ。洛に名たる舞。笠屋夏が女兒の小夏。弟子の
 三勝なんど。夥よひ集合て。晝夜酒宴よ侍らするに。わきて三勝ハ。花
 の中なる花よして。一トたひ笑ハ。城と傾るの美人なり。それハ立舞
 ふ形容ハいれしへの妓王佛にも勝るべく。愁と舍てうたふときハ。
 雨の海裳に。春の鳥の鳴がとく。亦是故郷を慕ふ池田の熊野。父を索
 かねたりし。鎌倉の微妙といふとも。これハ不及と見えしかば。吉

稚潜に眷戀して。思ひ惑へる氣色あるを。全八蝶九郎はやく猜して
 言の叙に。主君よ私語まうし。おのれら媒つかまつるべしとて。舞
 三勝に。そのよしをいひあらし。さましくに賺し誘へとも。三勝ハ舞
 舞こそすれ。結號たる夫に逢せり。寡婦にて果なん。と思ひ定めし事
 なれば。財多き人にも靡かき。又風流士も見かへりせきすべて。金銀
 をもて挑と威勢に乗して。通る人の席へハ。ふたハひ來たる事なか
 りし程に。今佞人等が。主君の爲に情を述るを聞て。うち腹たて。一言
 の應にも及ばき。その席の果るをまたぞ。心持煩しとて。歸りしが。そ
 の後ハ呼へとも絶て來たらせ。全八蝶九郎ハ。おもふに違ひてせん
 すべなけれと。彼にも問へて。主君にハ。翌の夜あハしまるらすべし
 とまうしつる事。己がたくて。二人密やかハ談合し。このうハ。夥
 の金をもて。三勝が身を贖ふより外なしとて。猛に典膳が方へ書簡

をおくり。用金の事といひ遣しぬ。鶴半七が五條に退きてより。吉
 稚の遊興に費せし金。少くの事にあらざり。或は五十金。或は百金。是彼
 の事にいひこしらへ。あはく。奈良より取よするに。半七が名を書
 加るといへども。その人の絶てこれをあらざり。また吉稚の。今僑居し
 て。よろづ寝くしといへども。元是朱門の公子なれば。金銭を手だ
 にとらぎ。多く二人の近臣に。掠られぬるところ鈍しけれ。かゝりし
 程。全八蝶九郎の。既に奈良へ金の事いひつかのしつ。まづ三勝
 が親を呼びて。縁由をあらせんとて。平三が家へ人をつかひにけ
 れと來たらねば。二人の大は焦燥。うち連たちて。二條河原なる笠松
 が家に到り。全八蝶まづ呼門て裡に入り。蝶九郎の外面に立在て。事
 の容子を張ひ。時宜によつて。共に平三と説伏んとす。そのとき全八
 郎の。あるじに對ひていふやう。洛の世に憚むる旅なれば。主君の名

ならせがたけれと。三勝に愛おほすのあまり。身を贖て。傍妻にせ
 んと宜するをもて。この事を相語ん爲に來れり。身價の乞ふがまゝ
 にとらすべし。舞の身よしてハ。こよなき僥倖なれば。鎮承仔細わ
 るべからざといふ。平三聞て冷咲ひ。某女兒に舞くのいたさそれと。
 汚穢どころと賣て。身の安樂をたもふものよあらざ。よしやこの事
 を三勝にいひあらすとも。彼にハ結髪の夫ありて。志金石より堅
 し。かゝれいふとも益なし。是までいくたびか。媒をもて。おなじす
 ぢなる事を。いへせし人あれども。女兒も承引せ。これも聽せして。回
 答のみな斯の如し。この外にいふべき事。聞べき事なし。とくく歸
 り給へ。といひかけて。つと奥に入りしか。全八郎呆果立し。おもな
 く外面に出て。蝶九郎にまか。のよと告るに。蝶九郎の頭を搔
 つ。もろとも。物陰に到り。さていかにせんといふに。全八郎と係

と。彼平三とやらんが。憎さけに回答せし。とが主君と續井の郎君
 とあらざる故に。思ひ悔なるべし。さればとて主の名と明白に
 らせがたし。所詮さりとて三勝を奪ひとり。さて媒をもて。身價を
 くらんに。彼の元來俳優家なり。一トたひ錢を見。いかでか點頭さ
 らん。さうあらぬかといへ。蝶九郎つくくと聞て。おかりといへど
 も人のこゝろの量がたし。彼もし承引き。又うけ引といふとも。その
 望數千金なら。毛と吹疵を求るにあらきやといふを。全八聞もわ
 へど。御邊いまたとが肚裏と猜せき。とが頻りに三勝をすゝめし。ハ
 郎君に假托て。本意を遂んと思へばなり。かくいふの面なき所行な
 れど。おのれ三勝よの命も惜とせど。今彼と身贖して。郎君に進らす
 る共。世の聞えを憚れば大和への將て行がたし。その用なき時にま
 うし給ひり。とが妻とせん事ハ。今おはしが程なり。御邊又これを助

て。この件の事成就せば。昨日奈良へいひつかのたる用金。すべ
 てその懐へ挾給へ。故いかよとなれば。途中なごに埋伏して。彼女子
 と奪ひとらん。誰かとが們的所爲とあらん。あらされば身價をと
 らするに及ぶ。よしや平三これを曉得て。女兒ととり復さんと聞と
 も。這奴を誑引出して。擊殺さんハいと易し。と信たちて密語にぞ。蝶
 九郎大に歡びて。一議にも及ぶ。かゝればこれの黄金を得。御邊ハ又
 美人を得ん。いづれも劣り勝りかし。この謀究て妙ありといふ。浩所
 に走卒めきたる男。忙しく走り來て。平三が家に呼門。おのれの管鎖
 晴元朝臣のおん使なり。今夜猛に賓の來ませるあり。よりに三勝を
 召せと宣はすとぞ。黄昏過る頃。迎の轎を來すべければ。その準備
 して。待ひへといひ果て。又忙しく走り去るを。全八の蝶九郎に密語
 して。物隆より飛で出。矢庭に彼男が頂髪を搔。廻り引かへせば。走卒ハ

大に驚き。是ハと一聲いひせもあへぎ。吭をいたく締る。手足を悶
搔き眼をそらさまにし。忽地に息絶たり。そのとき蝶九郎も走り出
こ。彼男が衣服袴と剣とり。二人どかくして。屍をほとり近き叢の中
に投入れてふかく躲し。後をも見まして逃去ぬ。このとき平三の管
領家より召るゝとといはん。とて。三勝が子舎にあり往來の人さへ
迹絶たる折なれば。かくとあるものなかりしとぞ。

夜轎の驟雨

さても赤根半七。五條の旅宿にありて。病と三十日にあまり。頃日
全八蝶九郎が。則君に遊興をすゝめ奉り。夥の舞子を呼び集るよ
しを傳聞て。大に驚き。これと諫んとするに。氣力おとろへて。起居も
思ふまかせ申。頻し心の焦燥つゝ。いたづらに日と過せしが。八
月の中旬に至りて。やゝおこたり果ぬ。翌ハつとめて髪と梳し。祇園

の御旅館に参りて。事の爲体を見はやとて。その準備をいたし。久し
く大和へ音耗をせさればとて。この旦那様を奈良へつかはせしが。
いじゞしく言葉敵もあき宿の。ひとり徒然に堪え。ゆく末來にかた
と思ひつゞけて。不圖柱に懸たる護身囊を見かへり。ひとり言して
いふやう。これのかさんが護身符なると。むかへ母の遺言にて。こが
護身囊と。送代にあつる事。おもへば。これも夢に似たり。そのとき母
の宣ひし。汝が成長の後。洛へ上る事あらば。おさんが母も索よ。と聞
え給ひし言の葉。なほ耳底を殘れども。こが母御さへ世に在さぎ。
これのみ近属洛にあれば。問よしもあきその人の。是もこの世にあ
りやなしや。紀念こそ。今ハ他なれ。是なくハ。忘るゝ際もありなんも
の。こハ誰がうへと守り給ふ。護身囊と。世をたかなま。かいとつて
頂に懸る。折しもあれ外面に。咳して來る人ありけり。金の鏝にハ庭



のむら菊もげおされ。野袴の裾よハ。夕露の玉を轉じ諸折戸を押ひ
らさつ。笠を脱捨ると見れば。これ別人にあらき。厚倉二郎大夫友
春なりしか。半七の端ちかう出迎へ。この厚倉氏。何事のありて訪
給ふやらん。まづこなたへとて。上坐に請きれば。厚倉對ひ坐して
あやう。其許の病着ハ。灰に聞しが思ひしより顔色もよし。今ハえや
平愈と給ふならん。といふに。半七答て。某いぬる月より。瘧病にて。起
居も自在ならき君の何とりちかく。うち臥てわらんハ。無禮也と思
ひて。この所に退き。翌ハ愈ん。あさてハ。おこたり果んかどて。宿老へ
も聞えあけ。老父にも告きて。思ひの外ハ。日を過せしが。何人に聞
給ひたる。いと不審事也といふ。そのとき厚倉聲を低うし。友春がそ
の事も。去りたるにハ。故わり。近曾吉稚君用金の事。近臣三人の連署
をもつて。去ハくや來さるゝと。大殿ふかく怪と給ひて。某と召れ。

汝密に洛に到りて。事の爲体を見て參れ。と仰せしか。いぬる月の
下旬よりこの地に來たつて。をりく逗留し。全八蝶九郎がすゝめ
によつて。郎君のおん行迹よからぞ。日毎に影の舞くを呼し。三勝と
やらんが身を贖ひ。これを妾よせんとして。それとハ。かたに。きのふ又
影の金を進らすべきよし。例の連署大和へ到來せり。匿とすれど。お
ほろげならき。それより先に。大殿へ聞えあけたるものやありけん。
おん憤ふかくして。昨夜猛に二郎大夫と召され。頃日汝に。吉稚が事
と櫻問せつるに。等閑なるハ。こゝろ得がたし。既に彼ものが淫樂放
蕩。世にかくれなし。事審ハ。説えらするに及ばせ。この事も。室町家
より制度あらハ。家門の滅亡踵とめぐらすべからぞ。汝いそぎ洛に
走ゆきて。吉稚主従を將て參れ。これ手づから首を刎からべて。後の
禍を禱ふべしと宣ひし。御氣色おどろく。思ひかへし給ふべ

うもわらねば。畏て。この曉に奈良をたち出。目今こゝに來れる也。さ
るによつて。御邊が病臥したるをも。いかでか去らざる事あらんや
といふ。半七の聞事毎に。且驚き且憂頭を低。手を又き。去ばし沈吟て
いふやう。郎君のおん行迹。よろしからざるよし。傳聞ながら。この
身病に犯されて。諫奉ると得ぬ。心ぐるしくひしが。用金の事に
于て。某絶てこれと去らせ。さて。今市布施の倭人。君に淫酒をす
ゝめ奉りし。のそならせ。それをさへ連係して。不忠の隊に入たる歟。
彼憎と朽ととて。齒と切て憤れば。厚倉かさねて。其許の姓名と載
するといへども。件の連署一枚も。御邊の自筆也と見えぬ。いひと
くは據あるべし。只いひとときがたき。郎君のれん悞なり。これを救
ひまひらせん。忠臣その越度にかつて。苦肉の計をなさで。の。
事ならん惜かな。せんすべのありながら。その人を得ぬといふに。半

七間もあへき膝とすゝめ。そのいかなる謀にて。某身を殺して
代り奉るべし。尤やく説去らし給へ。去らし給へといそがせば。厚倉
莞爾とうち笑て。御邊ハ志父ハ勝りて。忠臣無二なる事ハ。これよく
去るが故に。實ハ。脚中の苦計を告て。その事を行せん爲に來れ
り。さといへ。その身。不忠不義の汚名と厭ひて。この謀を行ひがた
し。かくてもなほ。こがいふ所。は従ひたまふべきかと問。半七答て。
いかかる謀か。い去らねども。おん悞を。己が身に負て。君と救ひ奉ら
ば。不義ともいへ。不忠ともいへ。厭ふ。却忠ならせ。と義勇む日本
たましひに。厚倉頻々嘆賞し。去からば。今宵いかに。三勝とや
らんと尊ひ去り。いづ地へなりとも立退給へ。これハ又夜の中に。郎
君のおん供して。奈良へ歸り。さて大殿に。ゆさんに。是彼縁故を。糺
明して。いへ。吉稚君の去ろし召せし事に。あらせ。すべて半七が私

情より起りて。三勝といふ舞々に感溺し。事な稚君に假托んじ較計しが。既にその伎倆發覺て。いひとくに言語なく。猛に件の舞くを將て逐電せり。かく證據分明なれば。一旦のおん憤を散され。御父子和順を給ひ。公私の幸甚しからんとまうさん。あかるじき。巷談街説。忽地その趣を更て。郎君のおん惡名を雪むべく。郎君是より行迹と慎給ひて。君家泰山のやすきに至らん事。みか御邊が孤忠にあり。今こそわれ年と經て。その便宜を見あひし。御邊の忠義ハ二郎大夫が命にかへて聞えわけ。めでたく歸參さしまうさん。こゝろ得給へ。と説示せば。半七ふかく感激し。この謀行ひ易し。只うけがたき。彼舞くを奪ひ去り。一日也ともひとつに住まば。眞の不義。似て深よからん。是丈夫のせざる所歟。不便あがらさし殺し。これ又遙にその地を去て。自殺せば後の思もあらき。皆是忠義の爲にハわれと。罪

なき女子を殺したる。半七が命と捐なば。彼女子の親族も。恨るよすがなかるべし。といひも果ぬに厚倉の頭を左右にうち掉て。赤根氏の言違へり。彼も又。人の子也。あでうむじんに殺すべき。せめてハそれ。添臥さし。不便をくハえて貧しくとも。もろともハ世と渡り。この事ハ預知らぬ。三勝親子と引放。憂を見する罪障を贖んこそ義士の所爲なれ。これ又方便をめぐらして。彼が身價を外ながら。平三とやらんにとらすべし。血氣に乗して人を殺し。身を失ひ給ふなど。理を述べて。いむれども。半七是をうけ引だ。いハじとハ思ひしが。事こゝに至て。己を得ぞ。心くるしき昔がたりを。聞てこそと察し給へ。某稚かりし時。結號たる女子あり。その名ハおさんじ呼びて。こが父にハ再生の恩あるもの也。不幸にして九才の冬。ゆくへあれどなりしより。今ハ存亡定かならき。されは近曾園花を娶りし事。

元來^{もと}こが情願^{じやうげん}にあらざり。父^{ちち}は通^{とほ}られて。その命^{いのち}は悖^{ひが}がた。彼園花^{かのゑんか}を娶^{めと}るといふも。いまは枕席^{まくらざし}を共にせざ。是^{こゝ}おさんが恩義^{おんぎ}をおもふふあり。まかるとに今舞^{いまま}くの三勝^{さんしょう}とやらんを伴^{とも}ひ。所謂^{すゐい}五十歩^{ごじゅうほ}。百歩^{ひゃくほ}のま。この條^{じょう}の事^{こと}によつて。多年^{たふねん}の志^{こころざし}と轉^まべきにあらざ。只^{ただ}これと一生^{いっせい}の物^{もの}いひおさめとおはされて。老^{おい}ていひじや便^{べん}なき。父^{ちち}半六^{はんろく}が久後^{くご}をよきに頼^{たの}み奉^{ほう}る。と手を膝^{ひざ}に置^お忠孝^{ちゆうかう}を。神^{かみ}も佛^{ぶつ}も憐^{あは}れなく奪^{うば}ひ去^さらせ給^{たま}ふ。三勝^{さんしょう}の結號^{けつごう}せし。おさん也^{なり}とい思^{おも}ひもかけだ。殺^{ころ}んといふもあはれ也^{なり}。厚倉^{こうくら}は縁故^{えんこ}を聞^きて。諫^{いざな}んやうもな。比^ひ稀^{ひら}なる壯士^{さうし}。濡衣^{ぬゐ}と被^おせ命^{いのち}さへ。隕^{えん}とするか。とはかりに。流^{なが}らみ見ていふとあし。秋^{あき}の暑^{あつ}の短^{みじ}くて。鶏^{けい}も埒^{あち}入^い相^{さう}の祇園^{ぎゑん}精舍^{しやうさ}の鐘^{かね}の聲^{こゑ}。常^{じょう}より耳^{みみ}もわらたま。既^{すで}に時刻^{じこく}になりぬとて。厚倉^{こうくら}やをら坐^まを立つ。半七^{はんしち}を見^みかへりて。これいや退^ひる也^{なり}。まうすまでにあら

ねども。捷^{はや}りて爲^な損^こじ給^{たま}ふな。といへ半七^{はんしち}茫然^{まうぜん}として。心^{こゝろ}易^{やす}く思^{おも}ひ給^{たま}へ。甲夜^{かや}より彼所^{かどころ}を徘徊^{はいかい}し。滯^{とど}よつて奪^{うば}ひ去^さり。もと家^{いへ}にあらざり。聞^きかへ。歸^{かへ}る途^{みち}中に理^{こと}伏^ふし。いづれこの夜^よをいたづらに。あかしのせじと夕間暮^{ゆふまぐ}。八月^{はつげつ}の天^{あま}の定めなく。まほしの曇^{くも}る雨催^{あめそよ}ひ。出^いべき月の出^いやらぬと。客^{きやく}と主^{ぬし}が影^{かげ}ニツ。磨^こあけたる武士^{ぶし}のこれや鏡^{かがみ}といひつべし。この日^ひ今市^{いまいち}空^あ八郎^{はちらう}布施^{ふせ}蝶九郎^{てつくわう}の既^{すで}に謀^{はかり}を定^{さだ}めて。管領^{くわんりやう}家の走^し卒^{そつ}と縊^{くわ}介^{けい}。直^{ただ}にその所^{ところ}を走^しり去^さりて。日來^{ひら}認^かりたる於^か呂世^{ろぜ}の轎^こ夫^ふ。足平^{あしひら}脚平^{きゃくへい}といふ惡混^{あくこん}に。金^{かね}を與^{あた}へてこれと相語^{あひかた}ひ。日の暮^{くれ}るをもちて。蝶九郎^{てつくわう}の剝^はとりし。衣服^{いふく}袴^{はかま}を被^おて。伴^{とも}の走卒^{しやうそつ}に打^う扮^{ぼん}。二人^{ふたり}の惡混^{あくこん}に轎^こを釣^つらして。笠松^{かさまつ}が家^{いへ}に到^{いた}り。管領^{くわんりやう}家の迎^{むか}なり。とくく參^まり給^{たま}へといふ。このとき平三^{へいざう}の真葛原^{まのくわはら}に起^おつ。いまは歸^{かへ}り來^きらぬと。やんことなきかん方^{かた}より。迎^{むか}の轎^こさへ給^{たま}はりしを。いつまでか待^{まち}すべき。



今夜三橋
布衣

布衣

二十二



應永十五年
七月十日

かみ

東

東

父の歸り給ふに程もわらじとて。三勝の夕間暮の心忙しさに。蝶九郎也とも去らざ。會釋をて外面に立出。門の戸鎖して。鍵をバ隣れる家よもてゆき。如此々々にて參るある。今にもあれ父のかへり給ひ。舞の衣裳の跡よりもたし給ひね。と言告給ひてよ。と詭おき。聽て轎に乗移るを程もあらせき足平脚平。もろ肩入れて擡出し。足に信じて走去れば。蝶九郎の轎より物蔭に立潜たる。全八と面をあひし。僥倖よ。と私語わひ。轎に引をひ走る折しも。半七のや。三勝が家を尋當。と見れば。門の鎖したり。隣れる家に立よりて。それがゆきぬる方を問。主人。東の河原を指して。尋給ふ三勝ハ。目今人に招れてまゐりしなりあれ見給へ。彼所へゆく挑灯こそ。彼が乗たる轎かれ。と聞もあへき。半七侍と見かへりつゝ。それやつて。といひかけて。飛がどくに追蒐たり。か。りける處に。平三ハ。この日管領の走卒が歸

りし後猛に真葛が原へゆくべき事出來て。申下尅より其處に赴き。思ひのほか時に時をうつせし程に。今ハ尤や。三勝が管領家へ參る比及ならんとて。只顧にこゝろ焦燥。昏たる道を喘ぎ。三條河原を走り歸るに。河原を東へいそがする轎の内より。半垂たる振袖と。挑灯の火光に見れば。柏に大の字の摺箔して。紛ふべうもあらぬ三勝なり。あお不審とこゝろつきて。轎夫もが爲体も。何とやらん怪しきに。引添たる走卒ハ。晝見し衣服を被たれど。その人ハ。あらざ。今一人。手拭もて面を曇たる武士ハ。向に三勝が身を償んとて。こが家に來たりし人に似たれば。矢庭に轎の棒端颯で。二歩三歩押戻し。こが己が女兒を何地へか將てゆくぞ。と問れて四人もろとも。驚とせしが。少しもささか。その問までもなし。管領家へ召さる。を。無禮せそと叱り退。走り去らんとすと。平三ハ。なほ立ふゝがりて。一步

も運せき。管領へ召さるゝならべ。かくての路こそ違ふたれ。いで郷
導いたすべし。いひもあへき。取たる棒端引めぐらせ。蝶九郎等
大に怒て。この過言なり。狼籍也。這奴息の根。とめよと。閔にぞ。轎夫と
も。轎扛居。打てかゝる息杖を。平三閃りとかい。潜り。右と左へ打ち
かひし。つとつけ入りて。足平が。息杖と奪ひとり。諸庸雑て。雄手なる。
小溝へ。撲地と打倒し。這あがらんとするところを。疊かけて。打杖よ。
肩間四五寸。打割れ。泥よ塗れて。死てけり。續てかゝる。脚平の。胸さか
いたく。突破られ。阿呀と叫て。仆れ。殪す。今市心。駭きながら。聲をもか
げ。抜打よ。切らんとする。刃の光に。平三えやく。身を反り。息杖をも
て。受とゞめ。追つかへし。つ。砍むすぶ。折しも。降來る。驟雨に。蹴揚の泥
の。飛花落葉。いとも。烈しき。太刀風なり。蝶九郎の。その。隙に。轎の。庭戸
搔揚て。三勝を引出し。手掛を口にはませ。て。肩に引かけ。逃んとする

に。半七も。また三勝を。この。處に。追蒐來たりしが。岸の。柳に。木がくれ
て。事の。容子。よく。ありつ。吐嗟と。忽地。跳り出。ゆくべき。前に。立たり
ける。蝶九郎の。思ひも。かけ。半七よ。遮留られ。この。中大に。膝。迷と
も。脱さ。と思ひ。己と。得き。三勝を。うち。捨て。打てかゝる。刃
の下へ。半七が。握固し。拳を。丁と。衝出せば。これ。から。膝とい。たく。打し。眼
瞋みて。刀を。捨尻居に。挫と。倒るゝ。を。半七の。見向も。せ。驚き。まどふ
三勝を。腋下に。楚と。扛抱き。河原に。添て。走去けり。平三も。全八も。この
景迹に。勢ひ。脱送に。呆れて。打も。あは。双方。一度に。引わか。かへせ
戻せと。呼ぶ。むる。聲ハ。只いた。づらに。蝶九郎が。耳よ。入り。けん。身ぶる
ひして。起あがり。仇も。身方も。玉鋒の。路さへ。いと。暗けれ。彼此を
索め。くれ。とも。えや。その。人の。見え。き。かりぬ。

三七全傳南柯夢卷之三 終

明治十五年十月廿六日翻刻御届

定價壹冊金廿錢

明治十五年十二月三十日出版

東京京橋區南傳馬町三丁目十三番地

翻刻出版

東京稗史出版



東京府平民

出版委員

白井五郎

東京京橋區新榮町
二丁目五番地

三七全傳南柯夢
開卷驚奇俠客傳

拾七卷
廿五卷

此二書の馬琴翁の著作
と面白き策子なり
と銭拾巻前金壹圓七
と宛發し或しやがて
心へし

